

隨難侍紫垣於直廬何分霜仗於御巷今各依初歸付官府

〔玉海〕治承四年八月七日丁亥今日湯治之後持病更發殆及獲麟忽請僧證智加持之間頗落居佛法効

驗也

〔明月記〕文曆二年正月四日戊戌實基卿辭納言尾張國等全非偽申之詞年來籠居去秋出仕所存已顯歟其上持病相發常如絶入非出仕之身

〔柳營諸舊例的〕八同勤引込届

文化二丑年十二月十一日

御届

寄合肝煎

近藤登助

私儀持病之疝積差發腹痛水瀉仕候ニ付引込養生仕候此段御届申上候以上

寄合肝煎

近藤登助

十二月十一日

老病

〔源氏物語〕五十四中やどりをぞまうくべかりけるなどいひて夜ふけておはしつきぬ僧都はお

やをあつかひむすめのあま君はこのまらぬ人舟を浮はぐみてみないだきおろしつやす

むおいの病のいつともなきがくるしと思給べしとほ道のなごりこそまばしわづらひ給ひけ

れやうくよろしうなり給にければ僧都はのほり給ぬ

虚病

〔增補下學集〕上二虚病キヨビヤウ

〔書言字考節用集〕五作病サクビヤウ又云虚病

〔日本書紀〕雄略十四八年二月遣身狹村主青檜隈民使博德使於吳國自天皇即位至于歲新羅國背誕

苞直不入於今八年而大懼中國之心修好於高麗由是高麗王遣精兵一百人守新羅有頃高麗軍士

一人取假歸國時以新羅人為典馬典馬此云而願謂之曰汝國為吾國所破非久矣一本云汝國果其